

幼児のジーンズの着用に関する意識調査

都立大田ろう学校 ○大野栄子 大妻女大 布施谷節子

東京学芸大教育 鳴海多恵子

目的：前回の幼児用ジーンズの動作適応性に関する研究によりジーンズは幼児の動作に対して不都合がある事が実証された。しかし、昨今ジーンズは幼児に多く着用されている実態がある。そこで、本研究では幼児のジーンズの着用状況とそれに対する親の意識について調査を行い、これからの幼児服としてのジーンズのあり方を探ることを目的とした。

方法：調査は足立区・世田谷区・八王子市の幼児の親約900名を対象に1993年4月～6月に留置法によるアンケート調査を実施した。回収率は約75%である。調査項目の主なものは、家族のジーンズの着用状況、親の幼児服及びジーンズに対する考え方、ジーンズの所持数とその種類等、母親の日常着に対する意識である。分析方法には、単純集計・クロス集計・因子分析を用いた。

結果：①ジーンズの着用率は、母(91%)、父(73%)、第1子(67%)、第2子(59%)の順に高い。②幼児のジーンズ着用は男児の方が多い。③ジーンズに対する親の考え方は因子分析の結果から、非活動性及び非着脱性、母の好みとジーンズのおしゃれ感覚の関連性、材質・構造・管理等を表す因子が明らかになった。④ジーンズは親子共に行楽での利用率が高いが、母親は家の中や近隣への外出にも多く利用している。⑤幼児服に対する考え方と母親の日常着との関連では、おしゃれ志向の高い母親は幼児服にもおしゃれ性を求める。⑥幼児のジーンズの服種別の所持率・利用率共にオーバーオールが最も高く、スリムが最も低い。また、着用初めの時期はオーバーオールが最も早く、2歳未満から着用する率は58.2%である。素材はストレッチ厚手が多い。